

国際センター通信(No.145)

国際センター通信は、土木学会の国際活動・技術交流を中心に情報を集めて国内外に発信しています。国際センターや海外支部（英国、韓国、台湾、トルコ他、全9分会）の活動や行事、ACECC（アジア土木学会連合協議会）の動き、調査研究委員会（31分野）の国際活動、国内外で活躍する技術者・研究者、最新技術やユニークなプロジェクト等、当会を通して今の土木界の側面を楽しく面白くお伝えしています。皆さまの御希望やリクエストをお待ちしています。

2025年が始まりました。今年は阪神淡路大震災30年関連行事や2025大阪・関西万博もあり、土木周辺もいろいろな動きがあることでしょう。そういった動きをフォローしながら面白い情報をお届けいたします。今年もよろしく願いいたします。

本号では、7記事をご紹介します。1) 佐々木会長のメッセージをお届けします。会長就任から半年間を振り返り、次の半年間の抱負を語っておられます。2) JICA長期専門官よりタイ国で実施したトンネルプロジェクトを解説いただきます。3) 木材工学委員会をご紹介します。木材工学委員会は、これまで「サイエンスアゴラ」に出展し、木材の役割や活用事例や新技術等を紹介しています。今回はその様子を報告いただきます。4) 国際センター外国人技術者グループからPRが届いています。グループでは、日本で仕事をする海外出身の技術者が情報交換、課題の共有と解決策の提案、留学生とのサロン、勉強会など活発に活動しています。5)~7)第12回東アジアダム地域会議(12th EADC、第9回全球エネルギー水循環プロジェクト国際会議(9th GEWEX-OSC 2024 札幌)、全国大会国際関連行事特別講演会「土木の分岐点」の学術交流基金助成事業3件をご紹介します。12th EADCでは、ダム貯水池の持続可能な開発・管理という世界のダムが抱える課題にフォーカスし、世界から専門家が集まり研究発表や議論を行いました。GEWEXは、国際学術会議(ISC)、世界気象機関(WMO)、ユネスコ政府間海洋額委員会(IOC-UNESCO)が出資する世界気象研究計画(WCRP)が進める中核のプログラムです。これまでの日本の成果と貢献が評価され、今回、初の日本開催となりました。最後に2024年全国大会国際関連行事特別講演会をお伝えします。2022年から「土木の分岐点」というテーマで国内外に専門家に、土木における分岐点と、それを超えて進むべき方向を議論いただいております。今回は過去の災害や事故、国家的な土木事業を振り返り、土木学会の姿勢や果たすべき役割を示しました。

ぜひ皆様の感想やコメント、読みたいトピックなどお知らせください。

会長 新年のご挨拶 交流の場としての土木学会をより楽しく！

新年あけましておめでとうございます。

会長に就任して約半年間、多くの方々にご協力いただき、土木学会としての大切な行事、そして会長プロジェクトを進めることができました。

9月の全国大会では「土木を風景から考える」と題した基調講演を行いました。風景を正面から捉えた会長講演は初めてかと思えます。東北地方の具体的な風景を例に挙げながら、自然と暮らしと人の相互関係の中で風景は生まれてくること、そして土木の作るインフラは、この関係の巡りを可能にする仕事であるとお伝えしました。



佐々木 葉
(土木学会 111 代会長)

11月19日には土木学会創立110周年記念式典が開催され、「土木の核とひろがり」をテーマに実行委員会の皆さんの大変なご努力によって、とても視野の広い企画の成果が披露されました。私からは挨拶において「土木学会の110歳のお誕生日をみんなで喜びながら、これからも元気に歳を重ねていけるように土木のアイデンティティを思い描く機会」とこの日を位置付け、大いに楽しませていただきました。

また10月にはアメリカ土木学会大会に参加すべく、フロリダに行きました。残念なことに巨大ハリケーンの接近のため主要行事がすべてキャンセルされましたが、レセプションにおいて新旧会長の交代式を拝見することができました。とてもフランクで楽しい雰囲気の中、最後には全員でASCEのクレドを唱和するなど、シビルエンジニアとしての誇りと連帯感が高まる場面もあり、とても刺激になりました。ASCEに遅れること20年、ようやく日本の土木学会に女性会長が誕生したことを皆さんとても喜んでくださいました。

会長プロジェクトも形になりつつあります。会員相互の交流のきっかけとなるJSCE交流名刺は多くの方に作成いただき、学会のいろいろなことを楽しく伝える動画も公開が進んでいます。これからも多くの方の協力を得て、土木学会が会員一人ひとりの「こうなったらいいな」を可能にするインフラとしてバージョンアップしていくために活動していきます。

【記：佐々木 葉（土木学会 111代会長）】

JICAタイ国トンネルプロジェクト 監理能力向上プロジェクト

タイの都市間高速道路網は発展途上の段階であり、現在供用されている道路は約300kmで首都バンコク周辺に偏っています。タイ運輸省が2016年に作成した「都市間高速道路網整備20ヵ年計画（2017年～2036年）」は、約2兆パーツ（約9兆円）を投資して約6,600kmを整備する計画であり、その中には山岳地帯の主要な都市を結ぶ路線も含まれ、良好な線形を確保するためにはトンネルが必要となっています。一方、タイにおける山岳トンネルの経験は、鉄道や水路トンネルはあるものの、大断面かつ非常用施設の運用管理が必要な道路トンネルの経験は乏しく、事業の着実な実施のためには、計画、調査、設計、施工監理及び運用・維持管理の能力向上が必要となっています。

こうした背景のもと、JICAはタイの主要な道路事業者である運輸省国道局（Department of Highways（以下、DOH））を対象とした能力開発プロジェクトを2020年12月から実施しています。プロジェクトの目標は特定のトンネル事業の完成ではなく、DOHがトンネル事業を円滑に進められる基盤を構築することであり、その活動には各種マニュアル類の作成を含みます。



遠藤 蔵人
(JICA 長期専門家)

マニュアル類は、事業サイクルのフェーズ（計画、調査、設計、建設、維持管理）毎に作成を行いました。これらは日本の基準類をベースにしており、例えば地質調査の方法や地山分類、標準的な支保構造の組み合わせは日本流の方式を採用しました。DOH 職員には欧米等の諸外国のトンネルに関する知見を有している者がおり、何故、日本流を用いるのか納得感を持てるように、複雑な地質構造が日・タイで共通するという点を説明しつつ作成を進めました。また一般的にトンネル事業では地山状況を調査段階で完全に把握することは不可能であるため、施工に伴う設計変更が必要となります。DOH 職員に対して設計変更の必要性、重要性を繰り返し説明し、設計変更のガイドラインを作成しました。こうして出来上がったマニュアル類は、今後、日本企業がタイにおいてトンネル事業を行うに当たって、やり易い環境に繋がるはずです。

またプロジェクトではパイロットスタディを実施しました。これは別途 DOH がタイの現地コンサルタントに発注して実施している実際のトンネルプロジェクトの設計業務に本プロジェクトで作成したマニュアルを適用して、DOH 職員はマニュアルへの理解を深めるとともに、タイの状況をマニュアルに取り込んで改善するものです。この過程の中で現地コンサルタントの設計検討結果に対して、JICA チームが適切にレビューを行うことで、DOH からの信頼を得ることができ、仕事のやり易さに繋がりました。

今後の DOH の課題は、技術・経験の蓄積、施工管理や運用・維持管理の着実な実施、マニュアルでは対応しきれない難易度の高いトンネルへの対応が挙げられます。今年 6 月にタイ国内のトンネル関連の学協会を担うタイ人の大学教授と共に日本を訪れ、土木学会、日本トンネル技術協会を訪問させて頂きました。タイにとっては日本の豊富な事業経験はとても有用です。また、タイで仕事をしようとする日本企業にとってはタイの現地情報は有用だと思います。例えば今後、学協会を通じた交流がそのような情報交換の場となれば大変有意義であると思いました。

タイ国の道路トンネル事業はまだ入り口の段階です。今後、タイ南部クラビのバイパス建設プロジェクトが、DOH にとっての最初の山岳トンネル建設プロジェクトとなると思います。このプロジェクトには先述のパイロットプロジェクトとして JICA チームも関与しました。クラビバイパスプロジェクトを端緒として、今後も日・タイの交流が継続、進展するような環境づくりを引き続き行ってまいります。



クラビバイパスのトンネル予定地付近（2022年3月）



国道 304 号の開削工法で建設された道路トンネル

【記：遠藤 蔵人（JICA 長期専門家）】

木材工学委員会の活動紹介 -サイエンスアゴラへのブース出展-

1. 「サイエンスアゴラ」について

サイエンスアゴラは、あらゆる人に開かれた科学と社会をつなぐ広場の総称であり、「科学とくらし ともに語り 紡ぐ未来」というビジョンを掲げて、国立研究開発法人 科学技術振興機構が主催し、2006 年から毎年開催されているイベントである。2023 年度の実績では、出展プログラム数は 137 企画、来場者数は 8,800 名となっていた。サイエンスアゴラは、小中学生の参加が多いので、将来の科学技術を担う世代への継承と交流を深める貴重な機会である。



三村 佳織
(木材工学委員会)

2. 出展内容の紹介

木材工学委員会は、現在までに 2023 年度および 2024 年度のサイエンスアゴラにブースを出展している。出展内容は、①木材を用いた液状化対策、②災害時の仮設木橋、③CLT（直交集成板）であり、他に出版した書籍も含め、委員会の主な活動を抜粋して紹介した。

来場者は多岐にわたっているため、模型や写真などを多用し土木関係者以外の方にもわかりやすい参加型の展示を心がけた。液状化対策は、小型の振動装置を持参して来場者の目の前で液状化現象を再現することで、対策効果を実感できたとの評判の声が多く寄せられた。仮設木橋は、広げると全長が約 2.5m になることから非常にインパクトが大きく、多くの来場者が足を止めて眺めており、是非実用化してほしいとの意見が多く寄せられた。CLT は、木材を積層・複合化して作製するエンジニアリングウッドの特徴を理解してもらうために、合板を製造する際に用いる板を 3 枚用意し、重ねる繊維の向きを変えることで、発揮される強度が異なることを体感してもらうことができた。

3. アンケート結果

ブースへの 2 日間の来場者は、100 組以上となった。来場者のアンケート結果からは、「身近なところに木材を増やしてほしい」、「花粉症なので特にスギを活用してほしい」といった、土木分野での木材利用について前向きな意見を多くいただいた。また、「今後の日本に必要な技術を知ることができて嬉しい」、「木材の面白い説明が聞けた」、「意外と木材が余っていることを知らなかった」などの意見もあり、通常の学会活動では出会えない方々とも積極的な交流ができ、委員会の活動内容を知ってもらう機会として大きな意義があった。



サイエンスアゴラ 2023 での出展ブースの様子



振動装置を用いた液状化現象の再現

【記：三村 佳織（木材工学委員会）】

外国人技術者サポートチームの活動紹介

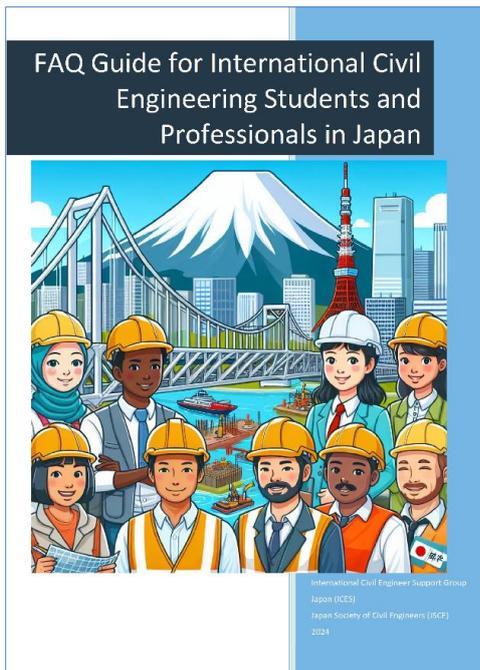
今回の通信記事では、外国人技術者サポートチーム (International Civil Engineer Support Group Japan) を紹介します。私たちは外国人技術者の皆さまが日本で快適に働き、充実した生活を送るためのガイドラインを作成し、必要な情報を提供しています。



TAN YEN XIN
(日本工営㈱)



侯 陳偉
(㈱大林組)



日本で働く際に知っておきたい基本的なマナーや心構えにつきまして、日本特有の職場文化やルールを理解することを支援しています。日本での生活を支える各種支援制度に関する情報も網羅しており、ビザや年金、税金といった重要な手続きから、クレジットカードの取得方法や資格取得のヒントまで幅広くカバーしています。専門的な知識を深めたい方には、土木分野で役立つ日本語の専門用語集を作成したので、是非ご参考してください。

今後、日本での仕事や日常生活で直面しやすい困りごととその対応例、日本の建設業界で働くための具体的な就職活動ガイドなどを紹介していきます。さらに、仕事を楽しみながら生活を充実させるためのコツや工夫、日本で働く外国人技術者の典型的な一週間のスケジュールなども紹介し、キャリア形成に役立つ実践的なアドバイスを提供していきます。



外国人技術者サポートチームは皆さまの新たな挑戦や日々の生活を支える一助となることを願っています。興味がありましたら、ぜひお気軽にご連絡ください！

外国人技術者サポートチーム (International Civil Engineer Support Group Japan)

お問い合わせは以下まで：

HP: https://committees.jsce.or.jp/kokusai13/f_e_support_team2

FB: International Civil Engineer Support Group Japan – JSCE

<https://m.facebook.com/61560484611508/>

チームメンバー：



【記：TAN YEN XIN（日本工営株式会社 交通運輸事業本部 交通政策事業部 交通計画部）】

【記：侯 陳偉（株式会社 大林組 本社 土木本部 生産技術本部 橋梁技術部 技術第三課）】

公益信託 土木学会学術交流基金助成報告 第 12 回東アジア地域ダム会議

1. 概要

会議名称：第 12 回東アジア地域ダム会議

(12th East Asian Area Dam Conference , EADC)

会期：2024 年 6 月 3 日～同 6 月 8 日（詳細は表-1 参照）

会場：名古屋市、名古屋コンベンションホール



野口 博章
(一般社団法人 日本大ダム
会議 事務局長)

日程		内容	行事
6月3日	PM	PM シティツアー（名古屋城、リニア・鉄道館）	夕食（居酒屋ナイト）
6月4日	AM	シンポジウム開会式	
	PM	基調講演、能登半島地震報告、一般セッション	歓迎会
6月5日	AM	特別講義、特別セッション	
	PM	ポスターセッション、一般セッション	若手技術者会合
6月6日	終日	技術ツアー（小浜ダム）	
6月7日	終日	技術ツアー（新丸山ダム、小里川ダム）	送別会

表-1 第12回 EADC の概要日程

今回の EADC のメインテーマであるダム貯水池の持続可能な開発・管理は、日中韓のみの課題にとどまらず、世界のダムが抱える喫緊の課題であり国際大ダム会議（ICOLD）の重点取り組み事項である。このため、EADC への参加要請は、中国大ダム会議および韓国大ダム会議はもとより、ICOLD の各加盟国に呼びかけることとした。この結果、本 EADC の参加者数は 15 ヶ国から 331 名（日本：244 名、海外：87 名）、シンポジウムへの論文投稿数は 45 編であった。また、本会議には Michel Lino ICOLD 総裁のご参加を得た。EADC としては非常にまれなことであり、大変光栄なことであった。

2. シンポジウム

会議の公用語は英語であり、大多数を占める日本人参加者の利便のために、英日同時通訳を行った。土木学会学術交流基金（一般公募助成）は、この同時通訳のための通訳士への委託費用、通訳機材の使用費用に充てさせていただいた。日本人にとって、会議内容の理解のために同時通訳は非常に有効であった。

2.1 テーマ

メインテーマを「次世代に向けたダム貯水池の持続可能な開発・管理」とし、サブテーマとして 5 つが設けられた（①気候変動下における貯水池・土砂管理、②ダムの安全評価と調査、③ダムの建設・維持管理における新技術と DX、④ダム・貯水池の環境と生物多様性、⑤ダムによる再生可能エネルギーの推進）。

2.2 口頭発表、ポスター発表

シンポジウムには 45 編の論文が投稿された。内訳は日中韓がそれぞれ 27 編、10 編および 2 編であり、その他海外 6 か国からの 6 編である。口頭発表として 31 編が選定され、14 編がポスター発表となった。

全体セッション	日程		内容
	6月4日	AM	・開会式、来賓スピーチ（Li Liangsheng 中国水利部福大臣） ・カントリーレポート（日中韓） ・Michel Lino ICOLD 総裁からのメッセージ
		PM	基調講演、Anton Schleiss 名誉教授（元 ICOLD 総裁） 2024 年能登半島地震によるダムへの影響の特別報告（金銅将史氏（国土技術政策総合研究所））
6月5日	AM	特別講演、廣木謙三教授（国際政策大学院大学）	

一般セッション	日程		セッション (議長)	口頭発表の編数 (国別内訳)
	6月4日	PM	ダム の 安全評価と調査(1)および(2) ((1)山口嘉一 ¹⁾ 、Zheng Cuiying ²⁾ 、 (2)有光剛 ¹⁾ 、 Joon woo, Noh ³⁾)	10編 (日本(2)、中国(5)、インドネシア(2)、北マケドニア)
6月5日	AM	特別セッション 気候変動下における貯水池・土砂管理 (角哲也 ⁴⁾ 、Mohamed Saber ⁵⁾)	7編 (日本(6)、韓国)	
	PM	ダム・貯水池の環境と生物多様性およびダムによる再生可能エネルギーの推進 (S.A. Kantoush ⁵⁾ 、Chen Guanfu ²⁾)	6編 (日本(2)、中国(2)、オランダ、ドイツ)	
		ダムの建設・維持管理における新技術とDX (安田吾郎 ¹⁾ 、Amgad Omer ⁶⁾)	8編 (日本(4)、韓国、マレーシア、中国、スイス)	
	PM	ポスターセッション (1時間)	14編 (日本(12)、中国(2))	

表-2 第12回 EADC シンポジウムプログラム

¹⁾ 日本大ダム会議, ²⁾ 中国大ダム会議, ³⁾ 韓国大ダム会議, ⁴⁾ 国際大ダム会議, ⁵⁾ 京都大学, ⁶⁾ Deltares 研究所



図-1 開会式の様子 (1列目中央、左より角哲也 ICOLD 副総裁、Michel Lino ICOLD 総裁、Anton Schleiss 名誉教授 (元 ICOLD 総裁)、平井秀輝 JCOLD 会長)

3. 技術ツアー

技術ツアーが6月6日および7日の2日間で行われた。視察先は、1日目が小渋ダム、2日目は新丸山ダムおよび小里川ダムであり、同時に馬籠宿散策と恵那峡遊覧が行われた。現地受け入れ等を考慮してバス2台に限定し、主に国内および海外からの約80名が参加した。



図-2 技術ツアー、新丸山ダムにて

4. 文化行事

6月3日には名古屋市内ツアー、夜には居酒屋ナイト、4日夜は歓迎会、最終日の7日夜には送別会が行われ、多くの会議参加者が参加した。居酒屋ナイトは特に海外参加者から好評であった。送別会では最初に、土木学会の有志から構成される土木学会管弦楽団「アンサンブルシヴィル」による演奏が行われ、プロ級の生演奏を楽しんだ。

【記：野口 博章（一般社団法人 日本大ダム会議 事務局長）】

第9回全球エネルギー水循環プロジェクト国際会議 開催報告

1. 総参加者数

45の国と地域から、研究者等の911名が参加しました。協賛機関・企業及びステークホルダー（国交省など）等の全ての参加者372名を加えると、約1,300名の参加者数となります。

2. 本国際会議の概要

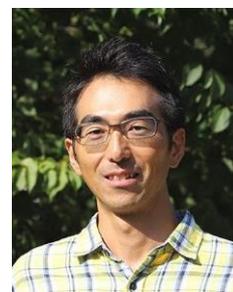
本国際会議は、アジア地域におけるエネルギー・水循環の集中観測、衛星観測、モデリング研究の推進、諸外国の人材教育への貢献、気候変動分野における政策等での社会実装などが評価され、日本で初めて開催されることになりました。海外から来日する研究者による世界の最先端の研究を共有する場であるとともに、日本国内における関連分野の関係者が産官学から一堂に集まり、分野や立場の垣根を超えて交流・連携できました。

3. 開催プログラム

開会式・閉会式、プレナリー（有識者による基調講演16件）、口頭発表セッション（30セッション：370件）、ポスターセッション（30セッション：445件）、ステークホルダーセッション（12セッション）を実施しました。



山田 朋人
（北海道大学大学院
工学研究院 教授）



佐藤 友徳
（北海道大学大学院
地球環境科学研究院
准教授）



開会式の様子



岡地 寛季
（北海道大学大学院
工学研究院 特任教授）

【プレナリー（基調講演）】

7/8の開会式後のプレナリー（基調講演）において、こやり隆史国土交通大臣政務官が講演しました。国土交通省の取組みとして、気候変動の将来予測データを活用した治水対策と気象予測データを活用したハイブリッドダム



こやり 隆史政務官

の取組について紹介しました。気候変動に伴い深刻化する洪水や渇水、水循環の維持・回復などの課題に対して、国際協力の重要性を強調しました。

官学連携の研究や社会実装が進展し、「WATER BY ALL」の考え方が共有されることへの期待が表明されました。

【ステークホルダーセッション 主催者/セッションタイトル】

7/8：国土交通省/気候変動影響予測を活用した洪水リスクの評価・治水対策の展開

東京大学・海洋研究開発機構・京都大学・気象業務支援センター/アジアにおける水循環変化
気候要因から適応へ～気候・災害予測に関する高度な情報を一般市民に伝えるには
東京都/東京都における気候変動を踏まえた風水害に対する取組み

7/9：農林水産省/気候変動下における農業生産基盤整備の対応

北海道大学・北海道河川財団/気候変動を踏まえた水災害リスク評価手法に関する最新の研究
と今後の動向

建設コンサルタンツ協会河川計画専門委員会/気候変動や流域治水に関する実務者の取組み事例の紹介

7/10：環境省/気候レジリエンス 科学的知見に基づく適応策の実践に向けて

土木学会北海道支部/温暖化が先鋭化する気候変動脆弱地域における水・地盤複合災害のリスク評価とその対応

国土交通省北海道開発局/気候変動の緩和策・適応策の社会実装に向けた地方自治体等の取組み

7/11：科学技術振興機構（JST）・国際協力機構（JICA）/SATREPS 開発途上国と共に地球規模

課題に挑む国際共同研究 気候変動と水に関わる成果と今後の展望

寒地土木研究所/積雪寒冷地における気候変動が災害・環境に及ぼす影響の把握と適応策に関する寒地土木研究所の取組み

北海道大学（全学）/北海道大学における水・気候に関する社会課題解決への取組み

4. 関連プログラム

1) 市民向け講演会、若手研究者セミナー

市民公開講座として、本国際会議開催前日の7月7日（日）に、北海道大学鈴木章ホールにて開催しました。参加者数は、会場参加者 121 名・オンライン参加者 260 名でした。

第1部：みんなで考えるこれからの気候変動 私たちの地域から始める気候変動への適応

○講演者：Jan Polcher 教授（フランス国立科学研究センター）、河原 恭一地球温暖化情報官（札幌管区気象台）、稲津 将教授（北海道大学大学院理学研究院）、寒河 江正主幹（北海道経済

部ゼロカーボン推進局)、立川 義通課長補佐(北海道建設部土木局河川砂防課)、林 恵子係長(札幌市環境局環境都市推進部)。

○高校生の研究発表

「厄介者の見方を変えて味方にする！」北海道立岩見沢農業高校

「中高生でもできる災害との共存」市立札幌開成中等教育学校



○学識者・大学生・高校生によるパネルディスカッション(事前説明:白川龍生准教授 北見工業大学工学部)

第2部:気象制御トークイベント

○登壇者:山口 弘誠氏・竹見 哲也氏・西嶋 一欽氏・萬和 明氏(京都大学)、羽鳥 剛史氏(愛媛大学)、黒 ラブ教授(東京大学、吉本興業) サイエンスコミュニケーター 黒 ラブ教授による楽しく学べる「お笑い科学」が展開されました。

また、本国際会議開催前日に、若手研究者による勉強会などの取組みも実施しました。

2) 企業技術展示

本国際会議会場内に10個のブースを設営しました。出展機関・団体は、次の通りです。国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)、情報通信研究機構(NICT)、アメリカ航空宇宙局(NASA)、欧州宇宙機関(ESA)、北海道河川財団、ドーコン、日本工営、八千代エンジニアリング、建設技術研究所、東急建設

3) 自転車ツアー

自転車ライドツアーを、本国際会議期間中(7/8-7/12)の13-17時で実施しました。5日間合計で43名(14カ国から45名申込み、2名欠席)の参加でした。JRあいの里公園駅発着で、石狩川沿い・道の駅とうべつ・スウェーデンヒルズ・ロイズカカオ&チョコレートタウンを巡る約30kmのコースでした。

4) テクニカルツアー

本国際会議終了後の7月13日(土)に開催しました。参加者数は、84名(一般参加75名+説明者・事務局9名)でした。気候変動について伝えるだけでなく、北海道全体の地形の成り立ちや治水、文化・芸術・開拓・産業の発展のストーリーが見えるツアーとしました。

【記:山田 朋人(北海道大学大学院工学研究院 教授)】

【記:佐藤 友徳(北海道大学大学院地球環境科学研究院 准教授)】

【記:岡地 寛季(北海道大学大学院工学研究院 特任助教)】

全国大会国際関連行事特別講演会「土木の分岐点」

国際関連特別講演会は、令和4年度全国大会（京都）より全国大会主要行事としての位置付けを得て、特別講演会、全体討論会とともに開催されるようになった。昨年、そして今年も全国大会の中日である9月4日（水）午前には仙台国際センター「桜1」にて「国際関連特別講演会 土木の分岐点@ジャンクション、みち、未来～パラダイムシフト～」と題し、同時通訳を導入してハイブリッド形式にて開催した。本講演会テーマ“土木の分岐点”は、土木界・土木技術者が必ず通過するポイントである。特に近年では、COVID-19 禍、多発する自然災害と甚大化、カーボンニュートラル、土木界の人材不足などの課題が重なり、我々は今まさに分岐点に立っているのである。本講演では、国内外の土木、そして土木周辺の研究者や技術者をお招きして、分岐点を越えるために、現状を見つめなおして、今気づくべき事・取り組むべき事、進む方向や方法を考察・議論している。



岩井 裕正
（京都大学 准教授）

今年は、基調講演を中村 幸司氏（日本放送協会 解説委員）にお願いし、パネリストに木村 亮国際センター長と徳淵 正毅氏（ARUP 構造設計一級建築士）、松永 省吾氏（インフララボ代表取締役）、党 紀准教授（埼玉大）をお迎えして、岩井 裕正准教授（京都大）の進行のもとで、今我々が立つ分岐点から進むべき方向を見定めて、どのように進むべきかを具体例をもって検討した。阪神・淡路大震災での液状化被害、笹子トンネル天井板落下事故、リニア中央新幹線事業等を例にとり、過去の災害・事故や国家的な土木事業が分岐点となり、設計指針や国民意識の変化へと繋がった事例について紹介された。さらに、まだ顕在化していないリスクや障壁を如何に予見して手を打つかという点に焦点を当て、パネリストらによる議論が行われた。この議論の中で、目先の損得勘定ではなく、地球規模での気候変動や、増え続ける世界人口に対する食料・水確保の問題といった、もっと大きな潮流の中で日本の国土政策を考えることの必要性が主張された。特に、土木学会が果たすべき役割は重大で、学術的な見解の発信は言うまでもなく、今後は土木学会がもっと専門性を発揮し行政的な助言を行うところまで踏み込まなければならないということを確認した。そして、こうした意見を一過性の「言うは易く行うは難し」で終わらせるのではなく、土木学会が覚悟を持って行動に移すことが何よりも肝要であるという結論に至った。

国際関連行事のもう一本の柱である「国際サマーシンポジウム&グローバル技術者ワークショップ」（5、6日開催）では73件の研究発表が行われた。そして24名の留学生がワークショップに参加しSDGs達成における土木技術者と土木工学・技術の役割を具体的な例を持って考えた。彼ら独自の視点で土木技術者と土木技術の意義を考えるユニークな機会であった。来年はさらに議論を進化させていきたい。



写真1 国際関連特別講演会



写真2 課題について熱心に意見交換する参加者

【記：岩井 裕正（京都大学 准教授）】

お知らせ

【今後の予定】

- ◆ 2025年2月25日「Net Zero 橋梁 WG 報告会 ～これからの Net Zero 橋梁の国際化を考える～」
<https://committees.jsce.or.jp/kokusai14/node/18>
- ◆ 2025年3月10日 第17回技術者ラウンジ DOBOKU「米国での留学と現場実務について」
<https://committees.jsce.or.jp/kokusai/node/417>

- ◆ 令和6年度 土木学会 会長室: <https://www.jsce.or.jp/president/2024/index.html>
- ◆ 海外インフラプロジェクトアーカイブス: <http://www.jsce.or.jp/e/archive/>
- ◆ 国際センターだより: http://committees.jsce.or.jp/kokusai/iac_dayori_2024
- ◆ 第211回論説(2024年12月版) オピニオン
(1) ライフスタイル創造につながる土木デザインへ
<https://note.com/jsce/n/n77878bcfa990>
- ◆ 土木学会誌 2025年1月号※JSCEウェブサイト(英語版)
<http://www.jsce-int.org/pub/magazine>

- ◆【Abstract 投稿募集中（2月3日（月）まで延長）】第10回アジア土木技術国際会議（10th CECAR）
<https://committees.jsce.or.jp/acecc/cecar>
- ◆ECCE: Strategic Plan 2023-2030
http://www.eccengineers.eu/news/2023/strategic_plan_2023_2030.php
- ◆ASCE Feniosky A. Pena-Mora 2025 会長&Marsha Anderson Bomar 次期会長
[Meet ASCE 2025 President Feniosky Peña-Mora;](#)
[Get to know your ASCE 2025 president-elect | ASCE](#)
- ◆16th International Workshop on Micropiles
<https://www.ismicropiles.org/workshops.asp>
- ◆WCSMO-16 の開催案内
<https://www.wcsmo2025.com/>

配信申し込み

「国際センター通信」配信希望者 登録フォーム

- ・日本語版: (<http://committees.jsce.or.jp/kokusai/node/31>)
- ・英語版: (<http://www.jsce-int.org/node/150>)

英語版 Facebook

直近の国際センターの活動について紹介しています。
(<https://www.facebook.com/JSCE.en>)

【ご意見・ご質問】 JSCE IAC: iac-news@jsce.or.jp 皆様のご意見やコメントをお待ちしております。